

『ソシオロゴス』によせて

——OBの研究生生活の反省から——

梶 田 孝 道

院生生活から大学教師に転じて、丸三年になる。教育に携わりはじめて新たに感じていること、言い換えれば、『ソシオロゴス』のメンバーたちと同じ空気をすい、その後それとは異なった知的世界に入って見えてきた——、この点について述べてみたい。社会学の常識として、我々の研究活動そのものが、その存在に拘束されており、我々が背負っている課題や役割が我々の行為や表現を規定している。私自身の場合も例外ではない。そこで、皆さんの場合とは別の視角から、いくつかの考えるための材料を提供できればよいと思う。

ところで、最近の『ソシオロゴス』は熱心に読んでいない。何故かを考えてみるに、一、二理由がないわけではない。第一に、多くの論文が「要約」「略説」「抄」という形をとり、作品としてのまとまりを欠いている。従って第二に、文章の流れを追うのに大変苦勞し、まとまったものを読んだという読後感が得られない。これが、読もうという意欲をそぐ。第三に、慣れない用語が多く、門外漢にはなかなかわかりにくい。第四に、私自身の価値観ないし趣味に関わるが、実証的な論文が少ない。その意味では、この論集は、理論的思考を優先させる研究者を讀者として想定しているといえる。

この辺から私の議論に移ってゆきたい。私は津田塾大学国際関係学科というところで教員をしている。ここは、狭義の国際関係論と社会学的、文化論的研究とが一体となった学科で、従って、社会学の専門学科ではない。

そこで社会学なり、比較社会論なりを教えて、第一に感じるのは、社会学に関する限り研究者（つまり大学院生以上）に対して勧めたい本は多いが、初心者（院生）に勧められる本は大変少ない、という点である。彼あるいは彼女が最初に読む社会学の著作の良し悪しで社会学そのものに興味をもってくれるか否かは決定されてしまうわけである。皆さん自身も、社会学をやろうという気になった、そもそもの社会学的著作との出会いを思い出してほしい。もちろん、研究者と初心者とは関心、世界が異なるのはいうまでもないし、研究者の世界の中で、固有の重要性をもつ議論や問題が多いことは否定できない。ただ、私自身の経験を反省してみるに、自分が大きく変わるほど影響を受けた本というのは、しばしば初心者としての感動と相通じるものをもっている。重要な問題提起は、研究者のみならず、もう少し広い範囲で初心者の心をも動かすものでなくてはならない。経済学や法学ほど専門化されておらず、社会的現実への固執、およびそこから理論へのフィードバックが常に必要とされる社会学の場合、とりわけ、そのことがいえるのではないか。少なくとも、私

自身は、そうした種類の論文をかいてゆきたいと思っている。

この二、三年間、学生たちに社会学への興味をもってもらうために最初に読んでもらうべきいくつかの本を捜したが、それが意外と少ない。試みに列举してみると………

C.W.ミルズ ……………『パワー・エリート』

同 ……………『ホワイト・カラー』

中岡哲郎 ……………『コンビナートの労働と社会』

石川晃弘 ……………『社会変動と労働者意識』

P.バーガー ……………『社会学への招待』

L.コーザー ……………『知識人と社会』

同 ……………『社会闘争の機能』

R.K. マートン ……………『社会理論と社会構造』

R. ドーア ……………『学歴社会 新しい文明病』

E.デュルケーム ……『自殺論』

ついでながら『ソシオロゴス』は社会学の入門者（学部学生）には勧められない。彼らに読ませたら、彼らはたちどころに下痢をおこすであろう。以前、たのまれて『ソシオロゴス』を津田塾大学で販売してみたが、購読者は極めて少なかったので、販売活動を中止した。パンフレット、情報源としては役立つが興味のもてる社会学の雑誌とは必ずしもうけとられなかったようだ。東大の学部ではどんなものか。

第二に感じたのは、他領域との競合・接触である。特にスタッフが社会学者だけによって構成されていない場合には、他の領域の人々に対しても社会学の有効性、存在意義を説得しなければならない。これが意外と難しい。これは、社会学の理論を語ることによってはなしえず、結局のところ、具体的なケース・スタディ（例えば、日系移民の文化変容、日英の階層比較、フランスの地域主義……）というレベルでなされる以外にない。つまり具体的な問題を社会学で切る場合の切れ味で示すしかない。理論それ自体のレベルでの議論の有意味性、リアリティーはもちろんあるが、私の場合は、それが余り許されず、その意味では東京大学の社会学研究室とは随分ふんいきを異にしている。従って社会学の世界では所与とされているような問題構成の自明性も、私の場合は、一たんカッコにくくらざるをえない。それゆえ、ある意味では最もオーソドックスな社会学者となる。社会学内部での新理論、社会学批判は、その上で行なうしかなく、社会学批判者や新理論家は、まず平均的な社会学のレベルで有能でなくてはならない。例えば、大学が抱えている問題群を社会学的分析によって把握し、改善策を提示したり、学生生活の実態調査ができなければならない。

このような現実には、社会学がある自明性の上ののっかって、いわば「亜文化」化しないようなチェックとして働いているともいえる。『ソシオロゴス』のメンバー諸氏に勧めたいのは、社会学の「亜文化」化に陥らないように意識的に歯止めをかけ、自分がおかれて

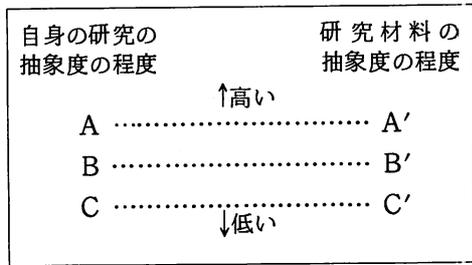
いる知的世界の相対比をはかってほしいということである。その意味で、外部の研究会への参加とか、現実の仕事に携っている人々を含んだ研究プロジェクトへの参加が望ましい。

これと関連するが、第三は、実証主義についてである。ここで述べるのは、社会学の議論としての実証主義についてではない。理論家にも必要だと思われる実証主義についてである。まず第一に、自分の勝負を必ずしも実証研究のレベルでしない人の場合も、意識的に、二の戦略的現場をもつことを勧めたい。「亜文化」に陥らない一つの工夫でもある。次により重要なことであるが、各人はいろいろな研究レベル(抽象理論,中範囲理論,実証研究)で生きることが可能である。例えば吉田民人先生の場合は、かなり抽象度が高く、農村社会学や家族社会学を専攻している人々には、実証家が多いし、彼らは、政策、調査に専念している人々とのつながりを多くもっている。また私は、どちらかという中範囲理論のレベルで生きている。しかし重要なことは、皆、同じ現実と対面しているという点である。

これは、法政大学の船橋晴俊氏に教えられたことであるが、Aレベルで社会学上の勝負をしようとしている人は往々にしてAと同じレベルの研究材料A'(例えば理論研究)しか読まず、Bのレベルの人はB'(中範囲の研究)、Cのレベルの人はC'(実証的研究やナマの資料)しか読まない。しかし、いずれのレベルで生きようとする人も、A' B' C'を同様に勉強しなければならない。

A' B' C'を含んだ総体が現実を構成しているのだから。A', B', C'のいずれかのみを勉強する人は、一種の片輪となるであろう。Aのレベルの人によって、B' C'は直接論文には生かされない。しかし、それが、リアリティー感覚の確保、「亜文化」化の回避を可能にするわけである。要するに、実証性が強い場合にはそれほど危険はないにせよ、抽象度が高い研究をする人が一次元的にならないためには、自己の情報を得る源をよく意識し、情報集め自体をある程度意識的に制御すべきであろう。

第四に、マーケットの問題を述べたい。これは、自分の研究成果をどういふ分野に売り込もうかといった余りに直接的すぎる問題のみならず、どのような分野の人々との交流の中で研究をしていこうかという問題でもある。就職機会の問題は、とりわけ各学問分野、各大学、社会学内部の各分野で格差があり、それ自体問題であるが、ここでは触れない。国際関係学科などというところに勤めていると、マーケットの国際性という点に気付く。社会学は日本国内に十分なマーケットをもっており、それゆえ一定の就職機会がある。これが何らかの理由で大変少ない場合(例えば、理学系)は、アメリカ等のマーケットへということになる。また、私の同僚の研究者たちには自己の学問形成を外国でした人が多い。我々の場合のように日本というまとまったマーケットが存在することは、他面では、日本研究を国際的なものにするのを妨げているといえる。いく人かの外国人研究者は、日本社



第1図

会に対しては非常な興味を示すが、日本の研究者に対しては余り関心を示さない。この辺の日本研究者のローカル性については、R.ドーア等が痛烈に批判している。むしろ、そうした点を出発点から意識する場合には（例えば、東大の李時載氏の場合）、自ずと違った途が拓けるのではないかと思う。第二に、いわゆる既存の学問分野（社会学、政治学、行政学、文化人類学…）といったマーケットがある。比較社会学をやる場合は、文化人類学や国際政治学とのつきあいが、住民運動論をやる場合は、政治学や行政学とのつきあいが重要となろう。第三に、理論研究者、実証研究者、実践家、生活者といった交流圏の違いがある。この種の問題は、就職機会の問題としてのみならず、どのような交流圏の中で自己の学問を形成してゆくかという問題としても充分意識すべきであり、先述した情報集めの制御の問題とも密接に関係している。

最後に気のついた点を一、二あげておこう。東京大学の社会学研究室の院生諸氏の場合（最近をよく知らないが）、「完璧主義」の危険をしばしば感じる。これは一見すると自己に謙虚なように見えながら、一面では裏返しの権威主義でもあり、余り勧められない。完璧な論文ができるまではゼロであっても構わないというやり方よりも、現在の自己の進歩の段階で、自己の最善のものを提示するのがよいと思う。そして、立派で完璧な成果を形成する過程それ自体を、研究者個人の枠にとどめないで社会的なものにすべきである。また、実証研究をする場合には、博士課程ぐらいになれば、実際家たちに何らかの寄与・貢献はできるはずであり、ギブ・アンド・テイクの関係は成立すると思う。自分の学問形成の過程のある時点から、ギブ・アンド・テイクの原理を導入するとよいと思う。それは社会調査をやる場合にはとりわけいえることである。また、東大の社会学研究室の場合は、完璧主義が許容されるほど、諸条件が恵まれているともいえる。津田塾大学の大学院の場合、D1、D2ぐらいでは、自己の成果の提示・客観化には、はるかに意識的、積極的である。要は、その時点でのベストを、他者の評価の眼に、恐れずさらすことである。

もう一つ、就職すると研究時間が大変少なくなる。院生時代ほどまとまった自由な研究時間をもてる時はない。自由に研究すること、そしてその過程で、研究計画のたて方、研究成果の一定の産出の制御も学んでゆくべきである。戦略的な問題を選んでどの程度のエネルギーと時間とを投入すると、どの程度のアウトプットが得られるか、という問題である。往々にして時間のない研究者は、就職後も、若い時に（それなりに）真剣に取り組んだ研究成果におんぶし続ける。しかし、こうした後向きのやり方でなく前進し続けるためには、研究対象の選択、研究過程の制御が重要となってくる。

以上、院生生活から教員生活に転じた経験を通して感じたことを卒直に整理したつもりである。当然ながら、私の経験からする過度の強調や言い落としがあるし、私自身の特殊な経験枠による制約もうけていると思う。しかし、皆さんとは違った視角から研究生活を見直す上で、少しでも参考になればと思い筆をとった。

（かじた たかみち）